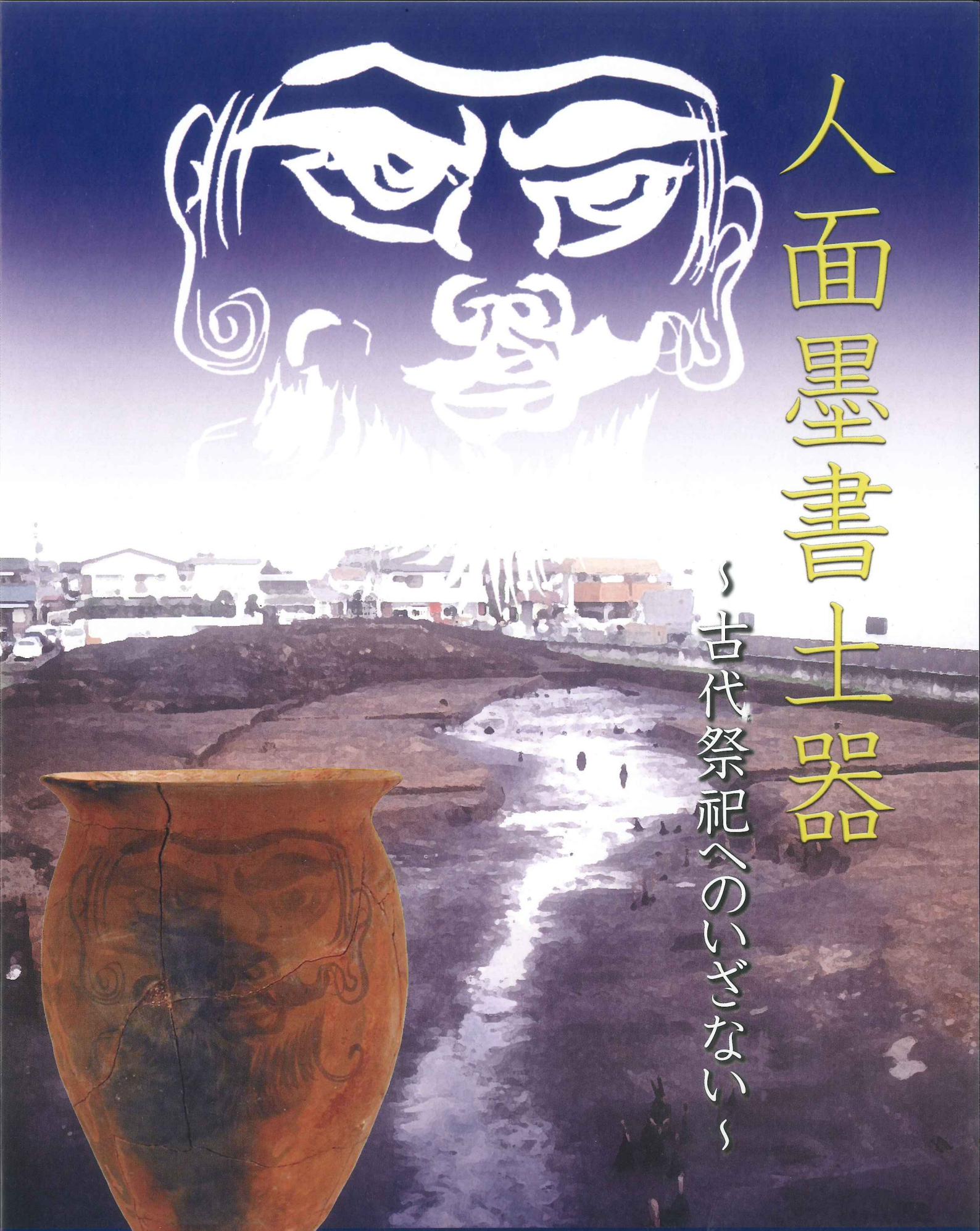


人面墨書土器

～古代祭祀へのいざない～

市指定文化財

人面墨書土器

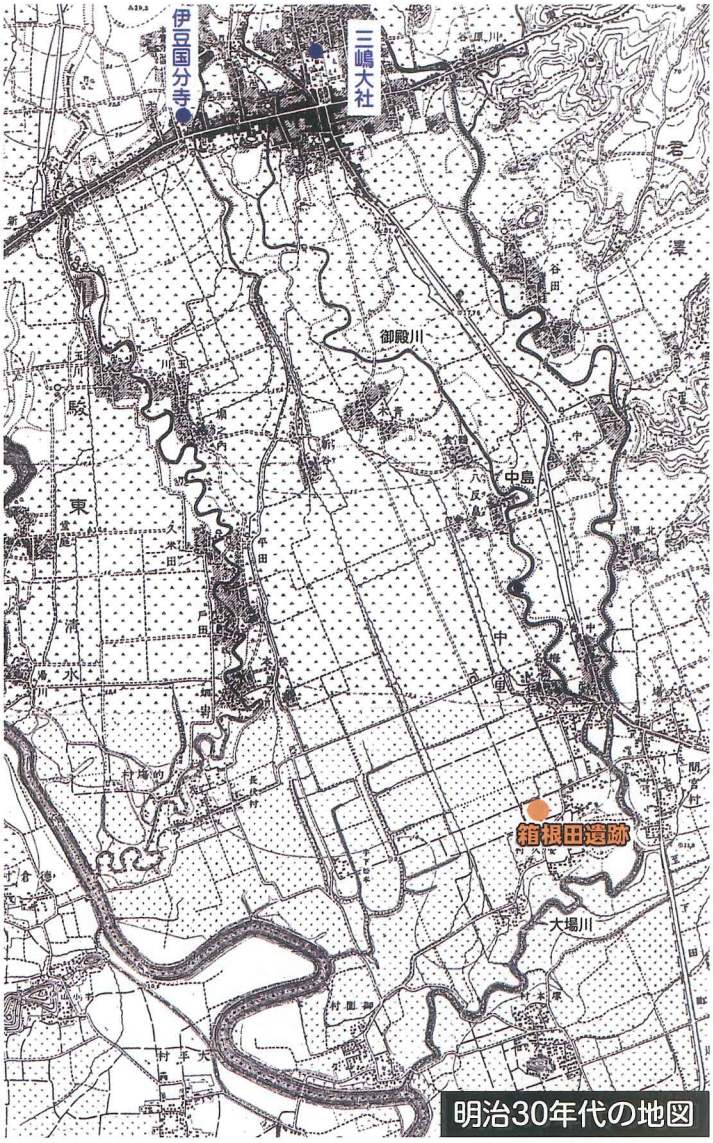
（三島市安久・箱根田遺跡出土）

箱根田遺跡について

箱根田遺跡は三島市安久にある約1,300～1,100年前の奈良～平安時代の遺跡で、標高11mの田方平野に位置します。現在、遺跡西側は国道136号が通り、住宅が立ち並んでいますが、昭和30年代までは水田地帯でした。

発掘調査は平成11年度に行い、奈良～平安時代の川跡と、倉庫跡が発見されました。川跡の幅は約12m、長さは約80mあり、さらに今回の調査範囲の外に延びています。また川の中からはたくさんの土器や木製品が発見され、その数は２万点近くになりました。

発見された土器の中でも最も注目されるものは人面墨書土器という土器で、この土器は表面に人の顔が墨で描かれています。まず、土器に描かれた顔を良く見て下さい。みなさんは、どのような印象をお持ちになりましたか？



明治30年代の地図

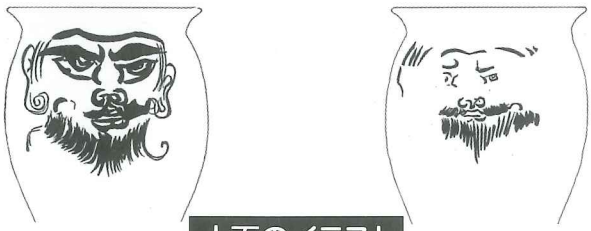
発見された河川（北から）

表 ↔ 裏　高さ39.9cm

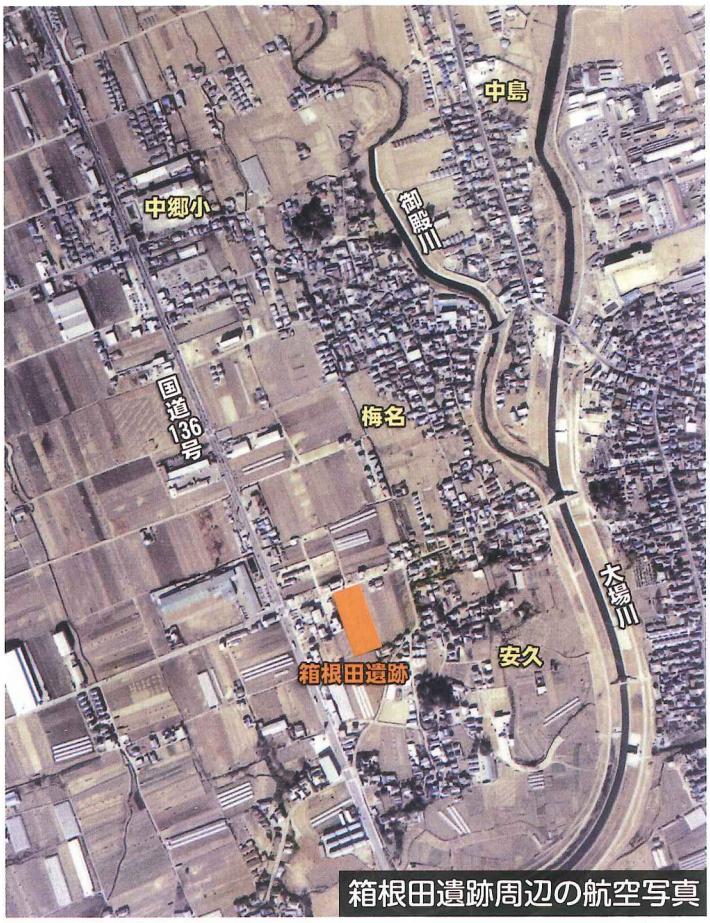
埋もれていた河川

調査前の箱根田遺跡は水田で、川の跡は何にも見当たりません。一番近い大場川までは約250mの距離があります。

しかし調査の結果、水田下約１mから川跡が発見されました。川岸は蛇行し、護岸のための施設は設けられていないことから、自然流路と考えられます。また川を横切る杭列も見つかっています。


人面のイラスト

土器の“顔”は何の顔？

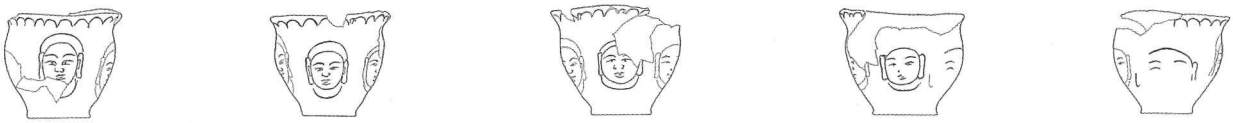


箱根田遺跡周辺の航空写真

いつの時代もそうですが、疫病の流行、日照りや水害などの自然災害は、私たちの生活に大きな影響を及ぼします。医学の進んだ現代においても、冬季になると流行する季節性インフルエンザは私たちの脅威です。奈良・平安時代に生きた古代の人たちにとっては、その恐怖はなおさらのことだったでしょう。当時の人々は流行病や自然災害、戦乱などの「禍（わざわい）」は、日常生活の中で犯した様々な罪や穢れが自分の体にたまることで発生すると考えました。

また彼らは、禍は「疫神（えきしん）」によって引き起こされるとも考えました。土器に描かれた人面こそが、その疫神の顔だと言われています。「髭面（ひげづら）で猛々（たけだけ）しい顔」や「切れ長の目を持ち、普通の表情とは違う恐ろしい顔」は、当時の人々が想像した疫神の顔なのです。

人面墨書土器は、今から約1250年前の奈良時代中頃、当時の都である平城京で出現し、その後、地方に広がっていきます。



人面墨書土器を使った“祓い”

人面墨書土器が発見される遺跡は限られています。中央では都のあった平城京や平安京、地方では国府（こくふ）など国の施設に関係する遺跡で、出土する場所も溝や河川跡がほとんどです。

また描かれる顔の数は１面、２面、４面、多いものでは８面に描かれたものもありますが、一番多いものは表裏２面のものです。箱根田遺跡では12点の人面墨書土器が発見され、５面に人面の描かれたものが１点ありました。この人面はほかの人面とは少し異なり、仏教の影響をうかがわせる珍しいものです。

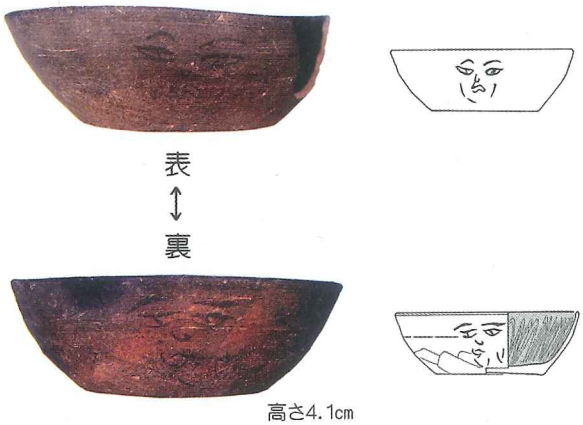
人面墨書土器は、禍の原因を自分に穢れがたまるためと考えた当時の人々が、罪や穢れを祓い、再び身を穢れのない状態に戻す「祓（はら）い」の儀式に使ったと考えられています。土器に息を吹き込むことで穢れを移し、もとの状態に戻せば禍を免れることができると考えたのです。

穢れの移された土器は、溝や川辺で祭祀を行い「水に流した」と考えられます。

発見された河川（南から）

高さ13.2cm

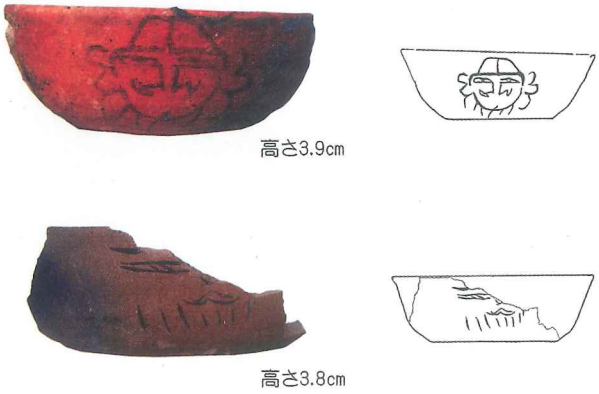
高さ11.6cm



高さ4.1cm

高さ8.0cm

高さ5.5cm


高さ3.9cm
高さ3.8cm

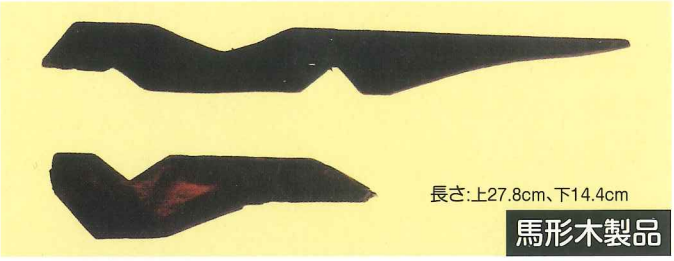
人形・舟形・馬形木製品

人形木製品
長さ:左から13.6cm、12.6cm、11.5cm

箱根田遺跡で発見された祭祀遺物は人面墨書土器の他に人形(ひとがた)木製品・馬形(うまがた)木製品・舟形(ふながた)木製品などがあります。人形は自分の身代わりです。人形で自分の身をなで、息を吹きかけることにより自分に付いた罪や穢れを自身から人形に乗り移らせ、身を祓い清めたのです。そして自らの罪や穢れを託した人形を、あの世に送るのが馬形や舟形木製品で、水辺で祓いの祭祀を行った後、これらに乗せて川に流したと思われます。

人形を使った祓いの儀式は、現在も三嶋大社で半年の節目の6月30日と大晦日(おおみそか)の12月31日に、大祓(おおはら)えとして行われます。

長さ 33.6cm
舟形木製品



長さ:上27.8cm、下14.4cm
馬形木製品

神へのお供え

河川からは土器や木製品の他に馬の上下顎歯が出土しています。日照りが続き、雨乞いのため水の神様に捧げられたのでしょうか？

また、大きさが7～8cm、なかには5cmにも満たない小さな土器も出土しました。実用品でないこれらのミニチュア土器は、その中に食べ物やお酒などのご馳走(ちそう)を入れ、神様に捧げたと考えられます。

馬の上下顎歯(左:上顎・右:下顎)

ミニチュア土器

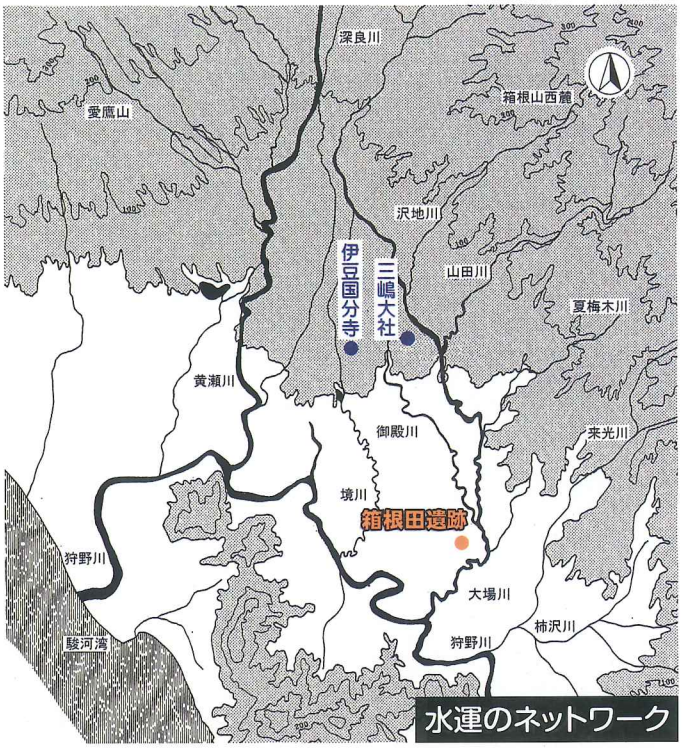
文字の書かれた土器

川の“港”

現在、箱根田遺跡の近くには川は流れていませんが、約1300～1100 年前の奈良・平安時代には幅約12mの川が流れていました。

箱根田遺跡を流れていた川は、下流部は大場川から狩野川につながり、さらに駿河湾に出ます。一方、上流部は大場川や御殿川につながると推定され、これらの河川はさかのぼると伊豆国府があったといわれる地域に至ります。

当時、駿河国から伊豆国に通じる官道は整備されていたと考えられますが、大量輸送の手段としては陸運より水運の方が効率的であったのかもしれません。箱根田遺跡は狩野川、大場川を利用した水運ネットワークの中間点に位置し、物資の集積、積み替えを行う中継地点として、川の港“津”の機能が想定できます。



水運のネットワーク

倉庫群の柱穴

計画配置された倉庫群

今回、箱根田遺跡で発見された河川の北側では６棟の倉庫が発見されています。規模はいずれも20㎡以下とそう大きくはありません。建物の建てられた方向がほぼそろい、柱穴（はしらあな）も重なっていないことから、倉庫が建てられた時期は、ほぼ同時期と考えられます。

また倉庫群の西側は溝で区画され、この溝に沿って板塀が回されていたようです。溝の西側には倉庫が建てられておらず、建物の配置に計画性がうかがわれます。

おわりに

箱根田遺跡の形成は奈良時代初めに始まり、その後、約200年間続いた津の機能を持つ遺跡です。出土した人面墨書土器や人形木製品などの祭祀遺物は、津を管理する有力者やそこで働く人々が行った祓いの祭祀儀式に使ったものと考えられます。

また津には他地域から様々な物資が入ってきます。それらの物資の中に穢れた物、当地域に禍をもたらす物が含まれると考えた津の管理者たちが、祓いの祭祀の他に疫神の侵入防止や水神の祭祀も行ったのでしょう。

祓いの予想図

編集・発行　三島市教育委員会　文化振興課　TEL 055-983-2672